ＪＡＣＥＴ北海道支部 15 周年記念論文集の発刊に寄せて

大学英語教育学会北海道支部長
栗 原 豪 彦

大学英語教育学会（JACET）北海道支部が昭和 61 年（1986 年）に設立されてから昨年でちょうど 15 周年を迎えました。15 年というのは短いようにも感じられますが、実は、その前身ともいうべき JACET 北海道地区研究会がすでに昭和 47 年（1972 年）秋に発足しているので、規模はともかくとして、実質的に支部的役割をもつ組織はそれなりの歴史があることをこの機会に確認しておきたいと思います。支部設立に関与された諸先生のなかにはすでに現役を退かれた方もおられますが、多くはまだ現役としてご活躍中です。なお、支部発足の経緯とその歩みの概要は、『支部ニューズレター創立 10 周年記念号(1997 年 3 月)』に詳しく、また本記念号でも別稿で支部史の一端が紹介されておりますので、そちらをご参照ください。道内の大学や短大の数は当時からそれほど増えてはおりませんが、設立当初 100 名程度だった会員数もその後徐々に増え、2002 年現在で 142 名になりました。また数だけでなく、応用言語学を専門分野とする会員が増えていることも最近の好ましい傾向です。支部は主要な活動として、これまで年１度の支部大会をはじめ、各種の研究会・ワークショップやニューズレターの発行を行ってまいりましたが、このたび、諸条件が整い、念願の支部紀要を刊行する運びになったことは、誠に喜ばしく、支部設立にかかわったものの一人としてたいへん感慨深いものがあります。

さて、創立 15 周年にあたる昨年は、９月 14 日～16 日に北海道での 10 年ぶり２度目となる全国大会（第 40 回大会、於藤女子大学）の準備に支部の総力を挙げて取りくんでいたためもあり、15 周年にかかわる行事のたぐいはひとまず棚上げせざるをえませんでした。全国大会のほうは、大会実行委員をはじめ会員諸氏の献身的なご尽力のお陰で、無事成功裏に終えることができました。この大会準備を通じて、あらためて北海道支部の役員ならびに会員の熱意と連帯感を実感することができたのは幸いでした。なお、全国大会のあれこれについては、『支部ニューズレター大会特集号』（2002 年 3 月）で詳細にご報告したとおりです。全国大会という大事業が一段落したところで、あらためて 15 周年という節目を記念する有意義な企画として本記念号の刊行計画が関係者から発議され、支部運営委員会の了承をへて、実現にこぎつけることができたわけです。

この記念誌の特色は、支部ニューズレターの単なる拡大特集号にとどまらず、

かねてよりの懸案だった支部紀要の創刊号として刊行されるという点です。北海道支部では以前から個人はもとより JACET の３つの研究会（いわゆる SIG）がそれぞれ活発な研究活動を行っており、その成果の一端は３年前の国際応用言語学会東京大会（AILA'99 Tokyo）での研究発表や JACET 紀要等で実証されているとおりです。JACET の研究会は、構成員の性質上、地域や所属大学・研究機関を横断するものであり、またその点に意義もあるわけですが、会員のすべてが専任の所属研究機関をもっているわけではありませんし、また研究成果の発表の機会に皆が皆恵まれているわけでもありません。さらに、たとえば共同研究の成果を発表する場として各大学の紀要のようものが適当かどうかも議論のあるところです。ご承知のとおり、JACET が年２回発行している『JACET Bulletin』は、なにぶん 2800 名の一般会員を擁する大所帯の学会の機関誌として、かなり狭き門であり、掲載論文数もごく限られております。現在、将来構想委員会において、機関紙の掲載論文のジャンルと掲載数を拡大する計画が進行中ですが、実現はもう少し先になる見込みです。こうしたこともあって、かねてより支部独自の学術ジャーナルを要望する声があがっておりました。こうした事情のほかにも、道内でも近年、応用言語学専攻の大学院生が少しずつ増えていることや昨今の大学をめぐるきびしい状況と多くの会員がおかれている立場を考え合わせると、支部独自の紀要をもつことの意義はじゅうぶんに認められるものと確信しております。支部レベルの紀要については、すでに関西支部（会員数 587 名）でかなり以前から実績がありますし、また北海道支部よりも多い会員（2002 年度 225 名）をかかえる九州沖縄支部でも６年前から年１回紀要を刊行して、成果をあげております。こうした心強い前例があり、また研究の蓄積と意欲には不足していなくても、本来の支部予算には独自のジャーナルを毎年発行する財政的余裕はもとよりありませんでした。しかし、幸い、ここ数年、会員数の微増により本部からの配分予算が徐々に増え、また大きな予算を要する支部レベルの事業を実施する機会が最近なかったことから、支部予算を切り詰めることで備費を積み立て、原資とする目処が立つようになりました。一方、本部からはこれまでの個々の研究会への補助とは別の研究補助費が昨年から支部に配分されることになりましたので、これが継続されれば、その趣旨を生かして活用することも可能と思われます。こうして、継続して刊行できる財政的見通しのもとで、本誌刊行の運びとなったものです。

もとより、いったんジャーナルの刊行に踏み切った以上は、会員の研究成果を問う場として一定以上の学術的水準を維持しながらこれを定着させ、学界の評価を獲得していくための不断の努力を欠かすわけにはいきません。記念すべき第一号となる本誌では、紀要の柱となる論文については、北海道における応用言語学研究の水準を示す６篇の論文が厳密な審査を経て掲載されることにな

りました。また論文以外でも、支部設立以来、支部の活動と発展を支えるためにご尽力くださった方々から JACET や英語教育にまつわる随想や思い出などを寄稿していただき、たいへん充実したものになりました。

わが国の大学をめぐる情勢は年々きびしさを増しており、とくに大学レベルの英語教育への有形無形の風当たりは今後もますます強まることが予想されます。JACET 北海道支部が地道で活発な研究活動を通じて、英語教育における理論と実践の両面の研究水準をさらに上げ、また本誌がその成果を問う場として活用され、幅広いレベルと年齢層に対応した英語教育の充実と改善に実質的に寄与しうることを祈念しております。支部会員の皆様には本誌刊行の趣旨と意義をご理解くださるとともに、本誌の発展に今後とも一層のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。最後になりましたが、論文募集や査読の手配などの面倒な編集作業に従事された編集委員の方々に厚くお礼申し上げます。